

「平成 21 年度 第 1 回真名川ダム弾力的管理検討委員会」 議事概要

○日時：平成 21 年 6 月 30 日（火）10 時～12 時 10 分

○場所：学びの里「めいりん」 2 階 洋室(大)

○議事内容

(1) 真名川の現状と課題、課題への取り組み

(2) 福井県による真名川浚渫工事状況

(3) 置石のその後の状況の調査結果

(4) 平成 21 年度弾力的管理試験の進め方

(5) 平成 21 年度弾力的管理試験の実施方針

(1)、(3)～(5)について事務局から、(2)について福井県奥越土木事務所から説明。
主な質疑応答、意見の内容は以下のとおりである。

■福井県による真名川浚渫工事状況について

(委員)

・八千代橋上流の浚渫工事において、河道外に持ち出した土砂 (8,000m³) はどうしたのか？ 元の河道と新河道の間の盛土 (3,000m³) の土砂は、どのような粒径か？ どのような形状にした意図は何か？

(福井県奥越土木事務所)

・河道外に持ち出した土砂は他工事の盛土に使用。元の河道と新河道の間の盛土は、粒径等の選別はしていないので、元の河床材料の粒度分布である。ただし、運搬できないような巨大な礫は持ち出さずに置いている。盛土の一部は、H21 年度の工事に使用する予定。関係者との協議により、元の河道を塞いで、長さ 300m、幅 20～30m、深さ 1～2m の新河道を造っている。

(委員)

・伐木や除根をするのは、良いことだと思う。今回の工事によって、元の河道がワンドのような状態となっており魚類にとって良い環境になると思われるので、生物関係の追跡調査をしてはどうか？

(福井県奥越土木事務所)

・追跡調査については検討する。

(委員)

・元の河道と新河道との繋がりはあるのか？

(福井県奥越土木事務所)

・元の河道と新河道の繋がり新河道の上流に少し残っている。

(委員)

・元の河道に付近の集落の生活用水が流れ込んでいる。水質が悪化し、魚が棲めなくなる

恐れがある。水質調査をできないか？

(福井県奥越土木事務所)

・元の河道の方にもう少し水が流れるようにできないか検討したい。

(委員)

・平常時の元の河道と新河道の水の配分を考えることだけでなく、フラッシュ放流や自然出水時に、たまりとなっている元の河道にどのように水を流すかも重要と考えられる。

(委員)

・H21年の河川維持修繕工事はどのような工事内容を考えているか？

(福井県奥越土木事務所)

・各工事予定箇所において、浚渫・伐木を併せて実施する予定。浚渫または伐木のみを行うものではない。現時点では詳細を決めておらず、関係者と協議しながら決めていきたい。

■置石のその後の状況の調査結果について

(委員)

・H20年度に設置した置石にはアユがたくさんいる。

■平成21年度弾力的管理試験の実施方針について

○フラッシュ放流計画

(委員)

・融雪期の放流量が少なく、水生生物が活動し始める頃には真名川は渇水状況となるため、雑魚を放流する前の3月頃に、150～200m³/s程度の放流をできないか？

・夏のフラッシュ放流の実施は、慎重な対応が必要。

(事務局)

・融雪によりダム水位が上昇し、例年は4月の終わりから5月頃に発電だけでは放流しきれないため融雪放流をすることが多いが、3月頃は発電で有効に放流しているような時期であり、その後に水位がどのようになるかは判らないため難しい。発電事業者の協力が必要。

(委員)

・夏期にフラッシュ放流を実施するかどうかについては引き続き検討することとしてはどうか。

○置土計画

(委員)

・漁業者の立場からは、置土は好ましくないと考えている。真名川ダム上流の土砂をダム下流に供給しても、真名川に土砂が堆積すると考えられるため十分な検討が必要である。

(委員)

・真名川ダムでは年平均 7 万 m³ 堆砂しており、本来はその量が真名川に流れていたと考え、置土量 200m³ は、年平均堆砂量の 1%未満であり、かなり少ない量である。ただし、現在の真名川では、川が流せる土砂量が限られるため、置土量には十分な配慮が必要である。秋のフラッシュ放流の際は H20 年度の残りの置土の粒度調整を行うこととし、今秋以降に置土をし、融雪出水で置土を流下させるという案を引き続き検討してはどうか。

○自然再生試験計画

(委員)

・置土や水際植生の伐採は自然再生としてよいと思われるが、石で堰上げて旧河道に導水するというのは自然の流れではないと思われる。どのような意図があるのか？

(事務局)

・堰上げは、旧河道へ導水することで河道が自然に変化していくことを、導水部を掘削するよりも簡単な方法で実現できないかと考えているものであり、それ自身に自然環境上の意図がある訳ではない。試験後に堰上げを撤去することも考えられる。

■その他

(委員)

・八千代橋上流の浚渫工事により川幅が広がったことによる地下水位への影響はどうか？

(事務局)

・昨年のフラッシュ放流時に設置した地下水位計の観測を継続しているので次回報告する。

(委員)

・真名川での取り組みは全国的にも貴重なものであり、全国に情報を発信してほしい。生物がどのように回復するかを明らかにするため、付着藻類の付着状況や、それを餌とする底生動物およびアユ等の魚類の調査を行ってはどうか。

(事務局)

・生物についても昨年実施したような調査は行いたいと考えており、調査内容等については次回の委員会で議論いただく予定。なお、今年は魚類の調査も行いたいと考えている。

以上